

フェミニズム言語学の夜明け

高 橋 隆

I. はじめに

すでに発表した『アマゾネスの言語学』（1988）では、主として性差別語の実態についての検討、「性と言語」ないしは「言語と性」を扱った。本論では、焦点をアメリカという国に固定して、これまで論じられることのなかった側面にも光を当てながら、女性と言語の問題を考えようとするものである。1960年代後半までは、「不可視の存在」であった女性達が、“フェミニズム言語学”を打ち出すに至るまでの過程を、アメリカ人の歴史の始まりから現在までを辿りながら論じたものである。

II. 黎明期

アングロ＝サクソン人によるアメリカ移民は、通常1620年にメイフラワー号がプリマス付近に到着し、101名の植民地民が上陸したことで始まるとされている。最初の冬に約半数が病死したので、正確には50名程の人間によって植民地アメリカが開始されたと言える。この中に女性や子供が含まれていたことは勿論である。しかしながら、手元にある資料で調べる限りでは、次のような男性の名前しか発見できず、女性は「見えない存在」であることがこれからも伺われる。

Alden, John	Hopkins, Stephen
Allerton Isaac	Howland, John
Allerton, John	Leister, Edward
Billington, John	Margeson, Edward
Bradford, Wm.	Martin, Christopher
Brewster, Wm.	Mullins, William
Britterage, Richard	Priest, Degory
Brown, Peter	Rigdale, John
Carver, John	Rogers, Thomes

Chilton, James	Soule, George
Clarke, Richard	Standish, Miles
Cook, Francis	Tilly, Edward
Crackston, John	Tilly, John
Dotey, Edward	Tinker, Thomas
Eaton, Francis	Turner, John
English, Thomas	Warren, Richard
Fletcher, Moses	White, William
Fuller, Edward	Williams, Thomas
Fuller, Samuel	Winslow, Edward
Ggardiner, Richard	Winslow, Gilbert
Goodman, John	

彼らの大半がピューリタンであったということは、かれらの生活全体がピューリタニズムに裏打ちされていたものと推察できる。ピューリタニズムは、それを内側からみる立場と、外側からみる立場では評価が異なる。アメリカに渡った初期のピューリタンが信仰の礎とした立場は、人間の善い行為〈功績〉によらない恩恵としての‘信仰のみによる’救い、教権や伝統でなく‘聖書のみ’を規範的権威と認める聖書原理、信ずる各人が直接神の前に立つという‘万人司祭主義’の三点を挙げることができる。中でも‘神の言’としての〈聖書〉に絶対的な〈信〉をおいているのが特徴である。それでは、その〈聖書〉では‘男’ (male) と‘女’ (female) をどのように見ているかを検証することにしよう。

創世記第一章では「神は自分のかたち人に人 (man) を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男 (male) と女 (female) とに創造された」とあり、この限りでは同権者としての存在であることが分かるが、第二章には「人 (man) がひとりであるのは良くない。ふさわしい助け手 (a help) を造ろう……神は人を深く眠らせ、眠った時に、そのあばら骨の一つを取って……ひとりの女 (a woman) を造り」という記述がある。こ

の場合は明らかに女は男に従属するものという解釈が成立することになる。このような矛盾する内容が描かれている背景には、意図的なテキストの配置替えがあったことは容易に分る。第三章の〈墮罪〉はメタファーとしての物語であり、『創世記』の作者が生きていた社会の男性中心的な(家父長制の)世界観を背景とした男性の女性に対する支配関係を記述したものである、と言うことができる。

ところでダーウィンの進化論など全く信じていない(米国南部の)バイブル・ベルトに住むファンダメンタリストにとっては『創世記』は決してメタファーではないのである。彼らにとっては、‘文化を担っていく使命と同様に、子孫を育成するための使命が男性にも女性にも同じように託されていた。女性は男性の仲間として、神が創造した世界では、全く受身的な存在、あるいは従属的な存在ではない’ということは考えられない事なのである。

ともあれ、旧約聖書に見られる反フェミニズム的とも受け取られる考え方は、旧約聖書が書かれたそれぞれの時代の社会的状況における家父長制(父権制)的思想から由来していることは明らかである。

それでは、新約聖書はどうなっているであろうか。四福音書には女性を差別ないしは軽蔑していると考えられる記述は見あたらないようである。問題はこれ以外の書簡集にある。『コリント人への第一の手紙』第14章の「婦人たちは教会では黙っていなければならない。彼らは語ることが許されていない。……もし何か学びたいことがあれば、家で自分の夫に尋ねるがよい。教会で語るのは、婦人にとっては恥すべきことである」、『テモテ人への第一の手紙』第2章の「女はつつましい身なりをし、適度に慎み深く身を飾るべきで……女は静かにして、万事につけ従順に教を学ぶがよい。女が教えたり、男の上に立ったりすることを、わたしは許さない」というような言説は“福音が法律から自由になっている”ことをたびたび説いているにもかかわらず、ユダヤ教の神学を捨てることができないために行われたものであるが、このような考え方に倣う者は多くいた。

Ⅲ. 潜在期

これまで見てきた時期は、聖書の教え＝生活の規範という構造になっているためと、女子の高等教育があまり普及していなかったということから、女性が自らの問題を〈社会問題〉という射程で考えることがな

かった時期である、といえる。

ここでは、女子教育というものを視野の中に含めながらアメリカにおける〈教育〉の問題を検討していくことにする。

ニューイングランドに移住したピューリタン達が最初に考えたことは、“聖書を読み宗教行事に参加する能力を保证するのに十分な教育を子供達に受けさせる”ことであった。そして“宗教の教えと国の法律が読めて理解できる”ように教育するために、1642年にマサチューセッツ教育法を制定している。Elwood P. Cubberley は「1642年の教育法は、英語圏においてはじめて国を代表する立法府が、全ての子供に読む力を養う教育を受けさせなければならないということを明確にした点で注目値する」と述べている(*Public Education in the United States*, p. 17 (Boston 1934))。しかしながらこの教育法では学校を建てたり先生を雇ったりする効力がなかったので、1647年に別の教育法を制定した。その法律では ① 50世帯を有する町は読み書きを教える教師を雇い、町は能力に応じた給料を払うこと ② 100世帯を有する町は(ラテン語)文法学校を設置しなければならず、違反の場合には£5の罰金が科せられる ことがきめられたのである。これら二つの教育法は、アメリカ公立学校の基礎をなすと共に、税金によって運営される初等義務教育を明確化した世界で最初の法律であった。

ミッドル・コロニーにおける初等教育は教会と公立のものが殆どで、無償の公教育が遅れた大きな要因となった。孤児や貧困家庭の子供の子弟教育もここでは行われていた。

南部コロニーにおける初等教育は、「金持ちの子弟にとっては、家庭教師、小さな有償の私立学校、本国(英国)での教育など様々な形であったが、貧困家庭の子供は子弟教育や貧困者学校のようなものしかなかった」(前掲 p. 23)

ニューイングランドでの教育は宗教教育が主流で、教師の採用も健全な信仰を持っているかどうかで決めた。テキストに使われた *The New England Primer* (1690)は三百万部以上も売れたといわれている。子供達への教育は読み・書き・計算が中心となっていた。

ところで、1636年にマサチューセッツ・ベイ・コロニー地方集会は、「学問を向上させ、それを後世に残し、また無学な牧師が教会で朽ち果てないように」ということからカレッジを創ることにした。こうして1637年にはケンブリッジが、1639年にはハーバード・カレッジが設立された。1693年にはウィリアム&メア

リ・カレッジが出来たが、牧師を教育するための学校であった。1701年に後のイエール・カレッジが出来ることが、教育目的は若者達が「教会と国家の働き手となること」であった。

さてここで〈女性の教育〉を検討することにするが、既に述べたマサチューセッツ教育法で“万人の教育”が開始したように思われるが、女子の参加に関しては資料が殆どなく、正確なことが分からないというのが実状である。しかしながら、18世紀中頃までには女子が‘タウンスクール’（カレッジへの予備校）に行っていたことは確かである。とはいっても、カレッジへ進学する女子がいなかったことも確かである。“dame school”（私塾），“town school”，“academy”が増加するにつれ、女性教師の必要性が高まってきた。男性よりもずっと安い給料で雇えるということもあったが、ともかくも女性の教師を養成することが緊急の課題となったのである。こうして〈教職〉がアメリカにおける最初の男女両方に開かれた職業となったのである。

女子教育の分野で有名な人物として引合いに出されるのは Emma (Hart) Willard である。地元の学校で学んだ後、Berlin Academy (1802-3) に進んだ。さらに Middlebury College で学ぼうとしたが、授業に出ることも学位を取ることも許されなかった。1841年に Middlebury Female Academy を、1821-1838 年には Troy Female Seminary（最初の女子カレッジ）を作った。ここで多くの影響力を持つ教師を養成したのである。

もう一人の女性教育家として Catharine (Esther) Beecher がいる。10歳まで家庭で教育を受けた後、10-16歳まで私立学校に通い、21歳でニューロンドンにある女学校で教鞭を取った。1824年に東部にある男子のカレッジと出来る限り似たものとして Hartford Female Seminary を創設した。1832年に父親と共にシンシナティに行き、そこに Western Female Institute を創設した。

これら二人の業績を外から見ると、二人とも非常に革新的で進歩的なように思われるが、ウィラーは女性の地位に関しては保守的な考え方を抱いているし、ピーチャーは反婦人参政論者で、女性は良き妻であり良き母であることによってしか向上しない、と考えていたのである。

ところで、人間社会の完全な平等が訪れたときはじめて男女の完全な知的平等がありうる、という考えを抱いていた Reverend Joseph Emerson も女子教育の分野では重要な人物で、彼ののもとに学んだ多くの学生が

女子教育のパイオニアとなっている。Zilpah Grant Banister, Mary Lyon, Alice Welch Cowles などがそれで、Grant は1828年にマサチューセッツのイプスウィッチに女子のためのアカデミーを創設し、Mary はそこでカリキュラムの編成などの手伝いをしていたが、1837年に Mount Holyoke Seminary を創設している。

1833年に創立された Obelin Collegiate Institute には女子のためのコースも当初から用意されていたが、1837年に四人の女子学生が学部に入學して学位を取りたい、と申し出たことから女子コースを学部に取り込み、合衆国最初の男女共学のカレッジとなったのである。やがて各地のカレッジで女子を受け入れるようになっていった。

19世紀半ばまでの女子カレッジは‘男子カレッジのようなもの’にしたい、という考えで作られたもので、そのようなものとして最も古い Georgia Female College（現在の Wesleyan College）は、1840年の卒業証書に“first degree”という称号（現在の学士号に相当）を記載している。

ハイスクールに在籍する学生数は、1890年には7パーセントであったが、1950年には70パーセントとなっている。1954年には中等学校へ進学する数は、男子が3,886,000女子が3,847,000となっている。また、大学および専門学校へ進学する数は、男子1,500,000に対し女子は700,000となっている。そして1970年度には男子の進学率は50.6% (983,794) 女子は42.3% (796,325)、1975年度には男子の進学率が46.3% (991,914) 女子が44.2% (918,211)、1981年度には男子の進学率が46.3% (957,000) 女子が44.6% (892,000) となっている。

IV. 顕在期

17、18世紀のアメリカの植民地は自給自足の農耕社会であり、その生産の場所は家庭であった。夫は農作業をし妻は家事・育児をするという仕事の役割分担があったが、妻は家の中で食料品の加工や、織物・衣服・ローソクなどを作る（生産的な）仕事もし、時には夫と共に野外に出て働くこともあった。自給自足の経済と言うことは、労働が貨幣によって価値づけられないということであり、男女の仕事は同じ比重で重要視されたのである。さらには、人口が少ない植民地では労働力は恒常的に不足しており、女性の数がとりわけ少なかったために、労働力としてだけでなく、労働力

を再生産する上でも女性は大変貴重な存在とされたのである。

植民地時代に女性が就いた職業として、肉屋、八百屋・鍛冶屋・印刷屋などの主人であり、すでに見た教師や医師が多数を占め、助産婦は独壇場であった。

しかしながら、植民地社会の女性観は〈女性は男性に従属するもの〉というピューリタニズムそのものであり、これに反対するもの（例えばアン・ハッチソン）は社会から追放・抹殺されたのである。植民地経済社会の環境のもとでは、一見すると〈男女平等〉の社会的地位を獲得しているように思えるが、男女の相対的な社会関係の上では必ずしもそのようにはなっていなかったのである。

このような女性観は、南北戦争が終っても維持され、19世紀および20世紀に入ると一層強化されていった。しかし、女性の社会的地位と役割は、経済・社会の変化に呼応するように変わっていったのである。とりわけ、19世紀前半に起こった産業革命はそれまでの自給自足経済を崩壊させたのである。その結果、男は生産活動、女は家事・育児という役割分担が確立したのである。しかしながら、家事・育児に専念できる女性は中産階級のものであり、移民などの下層階級の女性は工場で働かざるを得なかったため、産業革命は社会における男女の役割分担を分化させるだけでなく、女性の社会的階層の分化をも推し進めたといえるのである。‘女性は家庭に’という伝統的な女性観が培われたのは都市の中産階級においてであった。これらの中産階級はアメリカ社会の指導権を握り、文化の面においても社会的な価値観の面においても指導的役割を果たしていたので、彼女らの存在によって具現された伝統的な女性観は、アメリカ社会の女性観として固定化することとなり、今日に至るアメリカ社会を支配することになったのである。

ところで、17世紀や18世紀には表面化しなかった問題が、19世紀になると次第次第に吹き出して来るのである。19世紀前半、選挙権の拡大に伴う政治的平等化が進んだが、女性はこの動きから取り残されることになるのである。中産階級の女性の中には高等教育を受けられるものも増えてきたが、生産活動から疎外されたため、社会において自分達の能力を発揮する場がなく、一種のアイデンティティ・クライシスに陥るのである。〈余暇〉と〈能力〉とを発揮させる場を求めたこれらの女性は、社会的に女性にふさわしいとされた教会関係の社会奉仕活動や改革運動に乗り出していったのである。その多くは当時改革運動の中心となってい

た奴隷制廃止運動に参加したのであるが、公衆の面前で奴隷制反対を叫ぶと“女らしくない”という非難を受け、〈女〉であるために活動を続けることが困難な場合が多かった。しかしながら、「人間は平等である」という立場で黒人の解放を勝ち取る闘いを進める中で、女性自身も黒人と同様に社会において差別されていることを認識するようになるのである。男女平等を実現するうえで障害となっている伝統的な女性観に疑問を抱き、それからの解放を目指そうとするようになったのである。

婦人参政権については1840年代から活発な運動が行われ、19世紀後半西部諸州で次第に婦人参政権が認められ、1916年の選挙では婦人連邦議会議員も出現し、20年に憲法第19修正で婦人参政権が全国的に認められるようになったのである。

こうした運動の中でとりわけ注目されるのは、1848年のニューヨーク州セネカ・フォールズでののはじめての女性の権利大会である。約300人（男40人を含む）が集まり、エリザベス・ケイディ・スタントンの起草になる女性の権利宣言が採択され、婦人参政権要求の決議がなされたのである。

19世紀後半から20世紀はじめにかけて、婦人参政権は社会一般においても徐々に理解されるようになった。中産階級の女性の間に高等教育が普及し女性の社会進出も進むとともに、婦人参政権支持の輪も広がり、20世紀はじめの革新主義運動の高まりの中で、婦人参政権は改革を達成するための現実的な手段としてアメリカ社会一般に理解されるようになったのである。

1920年の時点では、全てのアメリカ女性が参政権獲得のために結集したかのように見えた。そして、それ以降女性は一つの集団として行動し、アメリカ政治に大きな影響力を及ぼすものと期待されていた。しかしながら、中産階級・労働者階級・様々な人種や民族集団に分散した女性たちは、自分達の地位向上への関心が次第次第に薄れてしまうことになるのである。

1920年代になって、人々の性意識が解放的になり、〈女らしさ〉のファクターに性的魅力が加えられるようになった。しかしながら、男女の社会的な役割の違いを強調する伝統的な女性観は依然として維持されていたのである。1920年から第二次世界大戦までの約20年間は、女性の就業率も殆ど上昇しておらず、新しい職場への進出もみられない。アメリカ社会における伝統的な女性観に対する大きな挑戦は1960年代になってから始まるが、これまでの伝統的な女性の生き方に疑

問を投げかけた人物としてベティー・フリーダンのいるので、次にその問題を検討してみよう。

V. 〈名前の無い問題〉

ベティー・フリーダンの *The Feminine Mystique* (邦題『新しい女性の創造』) を発表したのは1963年のことである。第二次世界大戦後、「女性は家庭に帰れ」の掛け声のもとアメリカの多くの職業婦人が職場を離れて家庭に帰った。彼女らはいつの間にか家庭に縛りつけられ、夫の世話をし、子供を立派に育て上げることが女性の務めという考えを押しつけられてきた。しかしながら、そのような女性の生き方で本当によいのだろうか、という疑問が生じてきたのである。

「15年以上もの間、女性のための講話や女性の間での話題は、子供の問題、夫を幸福にする方法、子供の成績をよくする事、チキンの料理法などに限られていた。だれも女性の男性に対する優劣などを論じなかった。“女性解放”とか“職業”とかいう言葉は人々をまごつかせ、数年の間だれもこうした言葉を使わなかった……しかし1959年の4月の朝、四人の母親が、ニューヨークの郊外住宅地で四人の他の母親たちとコーヒーを飲みながら、絶望したように‘あのことが’と話すのを私は耳にした。すると、話を聞かないでも、他の母親たちは、彼女が夫や子供たちや家庭のことを話しているのではないことがわかった。突然、彼女たちは同じ悩みを持っていることに気がついた。(しかし、その問題にはまだ名前がつけられていないのだ!) 私は次々に、無数のアメリカの女性がこの得体の知れない悩みを同じように持っていることを知った。……私はこの悩みのかくすことのできない徴候を認めるようになった。私は同じ徴候をアメリカじゅうで見た」(同書16-18頁) というこの“徴候”とは、男性がつくりあげた〈女らしさ〉という神秘的ヴェールをはぎ取って、女性が妻／母親としてだけでなく、人間として生きてゆく新しい道を切り開きたい、ということである。さらには、女性は目覚め、自分を見出し、自分の能力を伸ばし、社会と接触し、社会の中で人間として生きてゆく道を見出すこと、でもある。この本の著者は「女性が人間として生活していくためには、社会が変わらなくてはいけない。‘ただの主婦’としてだけでは、生きていけない。だが他にどんな生き方があるというのだろうか。本書を執筆している時にも、私はこの問題にぶつかって行き詰まってしまったことを覚えている。最後の章で、得

体の知れない悩みを解決する方法として、新しい生活を設計して、家庭や子供や夫や、女であるという性的な実現をも放棄しないで、なおかつ女性が能力を社会のなかで十分に発揮出来るように努力することを私は助言した」(同書278-279頁) と述べている。さらにまた、「男女の平等を実現するために必要な改革は、当時もまた現在においても、革命的なことである。男性と女性の役割を根本的に見直す必要があったが、これは社会の仕組みを変えることにもつながるのであった。育児、教育、結婚、家族、家の構造、医療、職業、政治、経済、宗教、心理、性生活、道徳、そして人間の進化にも影響を及ぼすことであった……女性にとって、人間としての可能性をまっとうするただ一つの道は、社会の本流に加わり、社会を形づくっていく種々の決定がなされる時に、積極的に意見を述べることである。女性にとっては、自由であり独立した自分を見出すためには、どうしても経済的に独立しなければならない。女性を寄せつけなかった職業上の差別を撤廃することは、第一段階の仕事であって、これだけで十分とはいえない。職業、結婚、家族、家庭のあり方を変えることが必要になってきている。たとえば重役—秘書、医師—看護婦というような会社、病院での構成は、両者、つまり男性と女性とを厳しく役割において引き離し、女性の場を狭めているのである。また女性の仕事は家庭だと言うが、たとえば社会保障、年金、退職手当などを支給することによって、経済的な保証を与えなければ、主婦の仕事の経済的な価値は確立されない。それに、家事や育児は主婦だけの仕事ではなく、夫、妻そして社会が共に分担すべき仕事なのである」(同書284-285頁) という現代的な問題提起も行っている。

さて〈妻／母親〉の理想像は〈良妻賢母〉(a good wife and wise mother) である(／あった)。アメリカの中産階級の女性(主婦)は、朝台所で朝食を作り、夫を玄関まで送り、子供達を車で学校まで送り、台所の床に電気艶だし器を走らせ、子供や自分の服にミシンをかけ、電気洗濯機と乾燥器を使い、食料品を買い出しに出かけ、成人学校や地域のボランティア活動に参加し、広々とした芝生の庭付きの家に住み、やさしい夫と、可愛い子供達に囲まれて生活することが幸福なことである、と考えていた。しかしながら、これは自分のための生き方ではなく、他人のための生き方でしかない。〈良妻賢母〉をパラフレーズすれば、「夫にとって良き妻であり、子供にとって賢い母親である(べき)」ということになる。そうした生活を送ってい

くうちに「これが全てなのだろうか？」という疑問を抱かない方が不自然であろう。〈名前の無い問題〉はここから生まれるのである。

VI. 男の国のアリス—言語の性差別

1973年に出版された Robin Lakoff の *LANGUAGE and Women's Place* は、後続の研究者からさまざまな批判はあるにせよ、この分野におけるパイオニア的役割を果たしたことで注目に値する著書である。この研究の目的は、「私たちの社会に存在しているといわれる一つの不平等、すなわち男女間の役割の不平等という問題について、その分析に役立つ証拠を提供しようという試みである。まずどういったことば遣いがこの不平等の性質や程度を物語っているかを発見し、そのうえで、この問題について言語学的立場から何かなしうることがあるかどうか、言語上の不均等を変えることによって社会的な不平等を是正していくことができるかどうか、資してみたい」（邦訳『言語と性』3-4頁）ことであると述べている。

言語上の性差の習得に関して、「幼い男女が最初から異なった話し方を習得するというわけではない……5歳以下の子どもの生活に強い影響を与えるのは、ほとんどの場合、母親やその周囲の女たちであるから、男の子や女の子がおぼえる最初のことばは、おそらく「女ことば」であろう。成長するにつれて男の子だけが乱暴な話し方の段階を経過する……乱暴な話し方に関しては、たぶん女の子のほうが男の子よりもはるかに厳しくたしなめられているはずである……二つの相違なることば遣いは、子どもが10歳くらいになり、男女別の仲間意識に別れるころまでにできあがっている」（同書7-8頁）としている。問題はここから始まるのであり、「女の子が、その特殊な話し方の様式を習得したという事実は、かえって、他の者が彼女を卑しい地位に落とし、人間としてまともに受けいれることを拒絶するために使うよい口実になってしまうであろう」し、「レディのように話すことを拒絶すれば女らしくないと揶揄されたり叱られたりする羽目になるし、女らしい話し方を身につければついで、ものごとをはっきりと考える能力がない、重要な議論には参加できない、人間として十分でない面があるなどと馬鹿にされる」ということにもなるのである。かくして、高等教育にまで進んだ女子学生は、〈女ことば〉と〈中性のことば〉という二言語使用者にならざるを得なくなり、「両者を使用する能力は、

たいていの目的には十分かもしれないが、どちらを使っているとしても自分の言語としてほんとうに気楽に感じることができず、自分のことば遣いが、場面においても、相手との関係においても、適切であるという確信がもてないことになる。ことば遣いの切り換えには、社会場面の微妙なニュアンスに特別な注意を払う必要があるし、いつ非を責められるかもしれないので、常に気を配っていなければならない」とよになると述べている。ここまで引合いに出された〈女ことば〉というのは「女しか使わないことば」と「女について話すときにだけ用いられることば」であると定義している。この定義は一般的には妥当であるので問題はないが、その総体的効果（overall effect）として挙げている次の言辞にはかなり問題がある。

「女ことばは、強い自己表現の手段を拒否する一方で、話の内容が日常茶飯の些事であることを示唆し、内容についての話し手自身の自信のなさを仄めかすような表現を助長する。また女を話題にするときには、女を、個人的な見解をもったまともな人間としてではなく、性その他の対象物として扱う。こうして女ことばは、女の人間的自己同一性を貶める」（同書10頁）

レイコフが研究していた「言語学」は、当時世界を席卷する勢いで広がりつつあった〈変形文法〉である。〈変形文法〉の考え方の一つに“理念上の言語使用者（ideal speaker-hearer）”というのがある。その理念上の言語使用者とは「完全に均質な言語共同体に属し、その言語を実際に運用するに当たって、記憶の限界とか、心の動揺とか、注意や興味の移行とか言い間違えなどという、文法とは無関係な条件によって影響を受けることのない人」（Chomsky 1965a）のことである、としている。つまり、言語上さまざまな間違いなどを犯す現実の人間の対極に、理想的な言語使用者をモデルとして設定するのである。このようなパラダイムの組み方の中で〈女ことば〉を考えようとすると、その対極にある〈男ことば〉が理想的な言語使用者のモデルとして設定されてしまうであろうことは、明らかである。事実レイコフは、〈男ことば〉を標準として、〈女ことば〉をその標準に照らし合わせて測るという陥穽にはまってしまうのである。

レイコフはまず女を指示する語の使用の検証から始める。例えば lady であるが、「英語を話す人たちの少なくとも一部のあいだでは、職業が卑しければ卑しいほど、その職業についている人がレディという名で呼ばれる可能性が大きいといえる」（同書42頁）として、cleaning lady とか sales lady は cleaning woman

や sales woman と少なくとも同じくらいよく使われるが、女の医者に対しては普通 woman doctor といい、lady doctor は非常に人を見くびった言い方で、侮辱行為になる、としている。それは「一見ウーマン、レディのどちらを使ってもよさそうな文でも、後者を使うと話題になっている事柄を些少化し、しばしば話に出てくる女性に巧妙に茶化す結果になりがちである」(同所) からだとしている。lady atheist (女無神論者) という表現は、この人物を頭脳散漫な変わり者、あるいは、いずれまともに受けとめる必要のない者という地位に引き下げている、という指摘をする。男の職業として当然視されているので male sculptor という語は存在しないが、woman sculptor ならまだしも、lady sculptor となると、どうしてもいいもの、郊外家庭専業主婦の暇つぶしという含みを持つ、としている。lady は、言及されている女が「自分のことも自分でできない無力な存在だということを暗に示している……レディの使用は、レディのためにドアを開けてやる行為に通じる」(同書46頁) と指摘する。

girl という語の使用も、一人前の女に対して適応され、man Friday (男秘書) と対になることばは、woman / lady Friday ではなく girl Friday である、と指摘している。これは girl には「若さ、軽々しさ、未熟さを想起させる裏で、責任の無さを思わせ(る)」(同書48頁) 働きがあるからだ、としている。

また単独では使われないことばの例として、mistress や widow / widower を挙げている。Rhonda is a mistress... とは言わず、Rhonda is John's mistress. というように「誰かの所有する〈娼婦〉」として表現されるし、*John is Mary's widower. の表現が許されない反面、Mary is John's widow. は通常用いられる表現である、としている。

さらには、単独で用いられた場合、男女では大きな意味の違いが生ずることばの例として、professional を挙げている。He's / She's a professional. において、男性の場合その職業は「医者、弁護士などの社会的地位のある職業」を示すが、女性の場合には「売春婦」を示す、という指摘をしている。あるいはまた、「未婚の人」を表わす bachelor と spinster についても、「バachelor というのは、ずっと女たちに追い求められてきているのに、その追及者たちから上手に身をかわしてきている人間である。ところがspinster というのは、男から求められたこと、少なくとも真剣に求められたことがない者、すなわち、求められざる古物である」という分析をしている。

このような分析を通して、レイコフは、「こうした差異が英語に存在するのは……それらはすべて、社会における役割の男女差を、それぞれのパターンの用法に反映しているのである」(同書96頁) とか、「男ことばと女ことばの差は、私たちの文化のもつ或る問題の兆候であって問題そのものではないということに注目しておく必要がある。男と女は別々の利害をもち、別々の役割を果たし、それぞれ異なった会話をし、人に対する反応も違っているという事実がまずあり、言語における男女差は、基本的にはその事実を反映しているだけなのである」(同書122頁) という〈性差別言語は性差別反映論〉を導き出し、はたまた、「社会の変革が言語の変革をつくりだすのであって、その逆ではないこと、言語上の変革は、ゆるやかで間接的な影響によって人々の姿勢を変えていくのがせいぜいで、その姿勢の変革すらも、社会の側にすでに受け入れ態勢ができているのでなければ社会的変革としてあらわれてこないということを認めなければならない」(同書91頁) という、かの有名な〈運命論的言語変革論〉を唱えたのである。これは後続するフェミニストから大変厳しい批判を受けることになったのである。

次に取り上げるのは、レイコフがまとめた女の話し方の特徴であるが、まず大きな枠組みとして、「些細なことや身の個人的なことにに関して賞讃の意を伝え、一般にありそうな反応を推しはかるというよりは、自分自身の情緒反応として賛意を表わす表現は女特有のものだ」(同書21頁) とか、「女ことばは、それがより丁寧であるという点で男ことばとは違うのだ」(同書101頁)、「女は、例えば男よりも種々の場面で自己主張に欠ける」(同書114頁) などという特徴を挙げ、具体的に次のようなことを述べている。

- a. 女は細かい区別の色彩語を使う。これは、色の区別などのつまらない決定のみ女に任されているからである。
- b. 女は「糞! (shit)」などの罵り言葉を避け、「まあ! (oh, dear)」などの表現を使う。人は、激しく表現する人に耳を傾けるものなので、これは、男の立場をさらに強化している
- c. 女は「すてき! (adorable)」のように、言及している概念をつまらないどうでもよいことのように感じさせる形容詞を使う
- d. 女は、話し手の自信のなさを表わす付加疑問や上昇的イントネーションを多く用いる
- e. 女は男より丁寧な依頼の仕方を用いる

レイコフによると、これらの特徴は女だけに特有なものではなく、社会の中の「非権力者」や「のけ者」にも共通して見られる話し方である、という。なぜならば、「ここでの決定的要因は純粋な意味では、性（ジェンダー）ではなく現実社会における力（パワー）なのだ」（同書112頁）からである、と主張している。この考え方も先に見た〈運命論的言語論〉と基を一つにするもので、男が支配する社会では女の言語は常に男に隷属するものであり、社会における女性の地位の低さも当然なことである、という帰結が生まれるのも当然のことである。

ところで、レイコフが「言語上の変革は、ゆるやかで間接的な影響によって人びとの姿勢を変えていくのがせいぜい」と唱えたのは、1975年のことであるが、この同じ年に米国の出版社が「言語上の改革」を行っている例があるので紹介することにしよう。このリーフレットのタイトルは『マクグロウ・ヒル出版社の性的平等表現に関するガイドライン』である。この抄録には「教材、参考文献、ノンフィクション作品などを書いたり編集する際に、このようなガイドラインが著者およびマクグロウ社の社員が性的差別などの問題に関して資料を提供をし、様々な問題についてのヒントを与えるものである。さらに、このガイドラインは男性と女性が出版に際してステロタイプにされてきたことを明かにし、言語が両性の不平等を強化してきたことを示し、出版社における両性の公正かつ正確で、均衡のとれた扱いを積極的にかつ実際に行っていることを示すものである」という文言が示されている。この序論には、フェミニズム運動に一つの新しい時代が登場したような感さえ与える言辞が載せられている。「セキシズムということばは、レイシズム（人種差別）との類推から、性（ジェンダー）に基づく差別のことを表わすものとされてきた。広義的な意味で、このことばは今日、それぞれの性を基とした男性及び女性のあらゆる恣意的なステロタイプを意味している。我々はこのガイドラインによって、マクグロウ・ヒル出版社から性差別者の考え方を追放し、全ての個人に自らの

関心を追及し自らの可能性を実現するこれまで以上の自由を保障しようとするものである。とりわけ、このガイドラインは、マクグロウ・ヒル社の社員およびそれに係わる著者に、男女が出版に際してステロタイプされてきたありかたに気づいてもらい、言語が不平等性を強化してきた役割を示し、わが社の出版に関して両性が公平、正確かつ平等に扱われてきたという積極的な態度を示すものである。

一つの方法は、あらゆる分野で著者や寄稿者となる女性を開拓することである。女性の著書や書評は出来る限り引用文献に載せるべきである。現在著名とされていない分野における女性の入手可能なアンソロジーを加えるべきである。

女性も男性同様、主導者であり、英雄であり、探検家であり、パイオニアであった。かつまた、科学、医学、法律、ビジネス、政治、公民学、経済学、文学、芸術、スポーツ、その他の分野で顕著な功績をあげているのである。これらのことを扱っている書物は、女性の貢献を考慮すべきである。女性の権利、機会、貢献が社会的慣習ならびに時代的制約によって制限されているという事態があるならば、その都度公に論議されなければならない。

我々は、文献の言語は時効になりうると考える。このガイドラインの勧告は、主として教材、文献、ノンフィクション作品一般のものに適用するものである」としている。続いて、「男女間の性差別のない扱い」という項目ではつぎのように述べている。

「男性と女性とはそもそも人間として扱われるべきであって、相対する性として扱われるべきではない。両者の人間性および特性が強調されたとしても、それは性の（gender）違いではない。性（sex）はステロタイプであってはならないし、恣意的に第一次的ないしは第二次的な役割にされてはならない」

これからかなり長い内容紹介になるが、アメリカ社会における一つの言語的過度期問題としての興味ある問題なので、この「ガイドライン」の全文を紹介することにする。

1. a. 多くの女性は、主婦や秘書のような伝統的な職業を選ぶとはいえず、いつまでもこのようなはまり役をしていたのではなく、様々な職業についている：必ずしもナースではなく医者や歯医者、単なる教師ではなく校長や教授、単なるソーシャルワーカーではなく弁護士や裁判官、単なる銀行員ではなく銀行の社長、女性参政権同盟のメンバーというよりも議会の一員としてというように。
- b. 同様に、男性は彼らの関心、態度、経歴において「男の神話」の対象となるべきではない。男性は自分達の価値はその収入に比例しているのでもなく、自分達の社会的地位によるものではないことを銘記すべきである。男性は女性よりも収入がなければならない、とか、家族を養う全責任があるなどと、考えるべ

きではない。

- c. 男性と女性に向いた職業があるという考えを壊さなくてはならない。性による仕事があるわけがなく、女性の‘女らしさ’に向く仕事とか、男性の‘男らしさ’に向く仕事などない。次のような仕事は男女とも当てはまる。会計係、エンジニア、パイロット、配管工、橋工事夫、コンピューター技師、TV修理士、宇宙飛行士、看護婦(夫)、小学校教師、秘書、タイピスト、図書館員、文書整理係、電話交換手、ベビーシッター

専門職の女性は最高位のレベルも含めて、全ての専門職に登用されるべきである。女性は男性や他の女性の上になつた地位に任用されるべきであり、雇用者ないしは上司が女性であると男性は面子を失うとか女性が働きにくくなるというような思惑を抱くべきではない。あらゆる職業は貴くかつ尊敬に値するものと見なされるべきで、いかなる職業(職業選択)も軽んずべきではない。職業が性によってステロタイプ化されていた頃に就業できた以上の様々な職業選択が男女とも行えるべきである。

- d. 就学前、初等、中等レベルの子供向けの本は、家の外で働く既婚女性の姿を載せ、好意的に扱わなければならない。教材は大抵の女性は専業主婦であるという描き方をすべきではなく、女性は男性と同様に結婚形態の選択ができることを強調すべきである。つまり、女性の中には生涯独身でいる人もいるし、性急に結婚する必要のない人もおり、また結婚しても子供を生まない人も、結婚して子供を産み、家の外で仕事を続ける人もいるのである。テキストには、結婚した人で子供を産む人もいるし、産まない人もいる、また時には、‘両親の一方ないしは両方が’家の外で働くことがある、と記載できよう。指導書には、全ての女性は〈母性本能〉があるとか、女性が働くために家族の情愛がそこなわれる、ということ述べるべきではない。両親が家の外で働く場合、子育ての分担をより多くカバーしあうこととか、保育園、幼稚園などの援助に頼ることになる、という記述をしたほうがよい。

1972年の労働省の統計によると、18歳以下の子供を持つ全ての母親の42%以上が家の外で働いている。しかもこれらの働く母親の約1/3は6歳以下の子供がいる。出版に際してはこの事実を反映すべきである。

男女共に料理、掃除、洗車、家の修理をしていることを述べるべきである。時には男が食事の支度をし、洗濯をし、おむつを換えたりし、女が本箱を作ったり、ゴミ出しをしたりすることも述べるべきである。

- e. 女子は遊びや職業選択に関して男子と同じ機会を与えられるべきである。例えば、教科に関して、女子は数学、機械に関する技術、活発なスポーツに興味を抱くようにすべきであるし、男子も詩、美術、音楽に関心を持ったり、料理、裁縫、保育をすることに恥ずかしいという気持ちを抱かせてはならない。教科書は男女とも同じにすべきである。例えば、家庭科は男女とも学ぶべきであり、工作技術もそうである。男性と女性は共にテキストの職業選択の場面に描かれるべきである。

- f. 女性は男性と同じように、主題に関係なく物語、例題、イラスト、討論の設問、テスト問題、活動に積極的に参加するものとして描かれなければならない。女性は料理、裁縫、買物などの活動と関係する場合のみ話題にされるようなステロタイプであってはならない。

2. a. 両性は‘男らしさ’とか‘女らしさ’というものではなく、‘人間の’強さと弱さを持った人類としてあるべきである。女性は男性と同じ能力、関心、希望をもっているものと描かれるべきである。大胆さ、主導権、自信というような、伝統的に男性の誇りとされてきた特質は、女性にも当てはまる。柔和、同情、感受性といった女性の特質とされたものは、男性にも当てはまるのである。

- b. 男性と同様に女性も、独立心があり、活動的で、逞しく、勇気があり、有能で、決断的で、忍耐強く、

真面目で、成功心に満ちていると描かれるべきである。女性は論理的に考え、問題解決力があり、決断力があり、自分の職業に関心があり、様々な職業的目標を追及し、女性の業績は公に認められるに値するものであるとされるべきである。

c. 時としては、男性は物静かで、消極的で、怖がり、決断力がなく、非論理的で、幼稚であると描かれるであろうし、同様に女性も時としては、荒々しく、積極的で、冷淡であるとされよう。論理的で客観的な男性、感情的で主観的な女性というステロタイプは破棄すべきである。より賢明で、勇敢で、成功に満ちた人物が描かれる場合、それは男性の場合もあるし女性の場合もある。他人より背が高く、体重もあり、活動的な人物のイラストは必ずしも男性とは限らない。特に子供が描かれた場合はそうである。

3. 男性と女性は同一の敬意、尊厳、真剣さをもって対応されるべきである。テキストにおいてもイラストにおいても、平凡化されたりステロタイプ化されてはならない。男性が知性や職業の地位によって知られるのに、女性は身体的特徴で知らされるべきではない。両性は同一のことばで扱われるべきである。男性ないしは女性の容貌、魅力、直観力は不遜な場合は避けるべきである。

[否定例]

Henry Harris is a shrewd lawyer and his wife Ann is a striking brunette.

(ヘンリーハリスは賢明な弁護士で、彼の妻アンはすごいブルネットだ)

[肯定例]

The Harrises are an attractive couple. Henry is a handsome blond and Ann is a striking brunette.

(ハリス夫妻は素晴らしい夫婦だ。ヘンリーはハンサムなブロンドでアンはすごいブルネットだ)

The Herrises are highly respected in their fields. Ann is an accomplished musician and Henry is a shrewd lawyer.

(ハリス夫妻はそれぞれの分野で高く評価されている。アンは立派な音楽家で、ヘンリーは賢明な弁護士である)

The Harrises are an interesting couple. Henry is a shrewd lawyer and Ann is very active in community (or church or civic) affairs.

(ハリス夫妻は注目の夫婦である。ヘンリーは賢明な弁護士で、アンは地域(教会、市民)問題では大変な活動家である)

a. 女性を描写する場合、性的諷刺、冗談、駄洒落と同様に、庇護のないしは女性擁護の語調は避けるべきである。例としては：身体的特徴に焦点を当てるもの (a buxom blonde ボインのブロンド)；特殊な女性用語彙を使用するもの (poetess 女流詩人, aviatrix 女性飛行士, usherette 案内嬢)；女性を性的対象とし、とりわけ軟弱な無力でヒステリーなものとしたり、女性をお笑いものにしたり、女性の問題をおどけや重要なものとしては取りあがないこと。

ステロタイプな用法は避ける：scatterbrained female 落ち着きのない女, fragile flower か弱い花, goddess on a pedestal 高嶺の花, catty gossip 意地悪女, henpecking shrew 夫を尻の下に敷くお転婆, apron-wearing mother エプロン・ママ, frustrated spinster 苛立ち独身女, ladylike little girl 大人ぶった小娘。女性を食い物にした冗談——例えば女性ドライバーとか小言を言う姑など——

[否定例]

the fair sex; the weaker sex
(見目美しい性, か弱い性)

the distaff side (女系)

the girls or the ladies (「成人の女性」をいう場合)

I'll have my girl check that. (あの娘に調べさせよう)

lady lawyer のように lady を修飾語として使うもの

the little woman; the better half; the ball and chain
(妻)

authoress, poetess, Jewess のような女性語構成要素

suffragette, usheerette, aviatrix のような女性語構成要素ないしは指小辞

libber (リブ)

sweet young thing

co-ed (名詞用法)

(注：論理的には co-ed は男女共学の大学にいる学生のことであるが、そのような意味合がないので、性差別用語である)

housewife

The sound of the drilling disturbed the housewives in the neighborhood.

Housewives are feeling the pinch of higher prices.

career girl または career woman

[肯定例]

woman (女性)

the female side or line (女系)

the woman

I'll have my secretary (または my assistant) check that. (または個人の名前を使う)

lawyer でよい (女性であることは次のような代名詞の用法で分る：

The lawyer made her summation to the jury.

性的標識はできるだけ避けるべきである。どうしても必要な場合は woman か female を使う：

a course on women writers とか the airline's first female pilot のように)

wife

author, poet, Jew

suffragist, usher, aviator (または pilot)

feminist; liberationist

young woman; girl

student

homemaker (家庭で働く人間を指す)

The sound of the drilling disturbed everyone within earshot (または everyone in the neighborhood).

Consumers (customers / shoppers) are feeling the pinch of higher prices.

女性の職業名を明示する：attorney Ellen Smith; Maria Sanchez, a journalist

あるいは editor, business executive, doctor, lawyer, agent など

cleaning woman, cleaning lady, maid

housekeeper; house (office) cleaner

- b. 男性の描写, とりわけ家にいる男性を描写する場合, 一般に使われる〈無能さ〉は避けるべきである。男性が食べ物を女性に頼っているとか, 家の仕事の不器用であるとか, 自分では何もできないものとして描くべきではない。

避けるべきもの: 何を着たり, 何を食べたらよいか, 病気の時自分の面倒を見られない男性, 笑いの対象とされる男性 (尻の下に敷かれた夫)

- c. 女性は例外としてではなく, 決ったものの一部として扱うべきである。

doctor や nurse のような本性的用語は, 男性と女性を含んでいると考えるべきである。“woman doctor” や “male nurse” のような修飾辞は避けるべきである。“女・子供の職業” “おとな(男)の職業” という言い方は避けるべきである。作者は女性がちゃんと仕事をしたときには ‘ようようやったね’ という態度は避けるべきである。(“Though a woman, she ran the business as well as any man.” 「女だけど, 男と同じように商売をやった」 “Though a woman, she ran the business efficiently.”)

- d. 女性は男性の所有物ではなく, 行動者としても言及されるべきである。pioneer, farmer, settler というような語は, 成人男性のみに適用されるように使われるべきではない。

[否定例]

Pioneers moved West, taking their wives and children with them.

[肯定例]

Pioneer families moved West.

Pioneer men and women (または pioneer couples) moved West, taking their children with them.

4. 女性の業績は認められなければならない。知的で, 勇敢で, 革新的女性は歴史上であれフィクションの上であれ, 女子の役割モデルを果たしたのであり, 女性の権利のために闘ったリーダー達は嘲笑されたり無視されたりするのではなく, 栄光と尊敬の対象とされるべきである。

5. 人類全体としてみたとき, 言語なるものは女性・女子を包括するものでなければならない。女性を排除するような用語は可能な限り避けるべきである。

- a. man という語は長い間男性を表すだけでなく, 人類全体も表してきた。しかしながら, 現在多くの人にとって, man という語は最初の意味(男性)を連想することが強くなってきたため, もはや人類全体を表すのに用いられるほど広義なものとは考えられなくなってきている。このような考え方を考慮して, man に変わり得る別の表現が考えられるべきである。man- という語が使われる場合, 女性も含まれているということが明らかになる方法が明確にされねばならない。

[否定例]	[肯定例]
mankind	humanity, human beings, human race, people
primitive man	primitive people (peoples) primitive human beings; primitive men and women
man's achievements	human achievements
If a man drove 50 miles at 60 mph ...	If a person (driver) drove 50 miles at 60 mph ...
the best man for the job	the best person (candidate) for the job
manmade	artificial; synthetic, manufactured; constructed; of human origin
manpower	human power; human energy; workers; workforce
grow to mankind	grow to adulthood; grow to manhood (womanhood)

b. 英語には he や she を表わす総称的な代名詞がないので、慣習的かつ文法的に “one... he”, “anyone... he”, “each child opens his box.” というようなやり方で男性の代名詞を使用してきた。しかしながら、総称的に人類全体を表わす場合にはこのような he, him, his はできるだけ避けるべきである。

さまざまな対応が考えられる

(1) 不必要な性識別代名詞を削除する

[否定例]	[肯定例]
The average American drinks his coffee black.	The average American drinks black coffee.

(2) 複数形にする
Most Americans drink their coffee black.

(3) 男性代名詞を one, you, he or she, her or his とする。

(4) 男性や女性に応じた表現にする

[否定例]	[肯定例]
I've often heard supervisors say, “He's not right man for the job,” or “He lacks the qualifications for success.”	I've often heard supervisors say, “She's not the right person for the job,” or “He lacks the qualifications for success.”

(5) 反復が多かったり、的外れな言葉遣いをしなければならないという問題を避けるため、総称的な he を自由に使ったほうが良いように思われるが、序文および本文の男性代名詞は簡明のために用いたものであり、それは男女を包括しているということを強調するほうがよい。

これらのガイドラインは、言語改革に伴う困難さに対する僅かな解決策を提起しているにすぎない。提示した例文の正解は文脈や著者の意図に従わなければならない。例えば、教師と生徒との一対一のやり取りを強調したコンテキストで複数形を使うことは間違いであろう。そのような場合は、he or she か、he と she を交互に使うのが適当であろう。

c. man で終る職業用語は、特殊なものを除いて出来得る限り両性を含むことばにすべきである

[否定例]	[肯定例]
congressman	member of Congress; representative (ただし Congress <u>man</u> Koch and Congress <u>woman</u> Holtzman)
businessman	business executive; business manager
fireman	fire fighter
mailman	mail carrier; letter carrier
salesman	sales representative; salesperson; sales clerk
insurance man	insurance agent
statesman	leader; public servant
chairman	the person presiding at (または chairing) a meeting; the presiding officer; the chair; head; leader; coordinator; moderator
cameraman	camera operator
foreman	supervisor

d. 読者がすべて男性であることを前提としたことばは避けるべきである

[否定例]	[肯定例]
you and your wife	you and your spouse
when you shave in the morning	when you brush your teeth (または wash up) in the morning

6. 男女を明示したり描写したりすることばは両性を平等に扱うべきである

a. 男女とも対等なことばを使うべきである

[否定例]	[肯定例]
the men and the ladies	the men and the women

the ladies and the gentlemen
the girls and the boys

man and wife

husband and wife

lady and gentleman, wife and husband, mother and father は役割語である。women の意味で ladies が使われるのは, men が gentlemen の意味で使われている場合だけである。同様に, 女性が wives や mothers と呼称されるのは, 男性が husband や fathers である場合に限る。male shopper に対する女性客の呼称は housewife ではなくて customer である。

- b. 女性は本人の名前で呼ばれるべきであり, 文脈上必要な場合以外は wife, mother, sister, daughter のような役割語で呼ぶべきではない。ましてや, (Prime Minister Gandhi) という長い呼称よりは文脈上短くて便利であるとか, 男性の呼称と対になっているという場合以外は, 婚姻関係を表わすことば (Mrs. Gandhi) で呼ぶべきではない。

- (1) 女性は男性と同様に名前で呼ばれるべきである。どちらもフルネーム, 苗字か名前だけか, 肩書で呼ばれるべきである。

[否定例]

Bobby Riggs and Billie Jean

Billie Jean and Riggs

Mrs. King and Riggs

Mrs. Meir and Moshe Dayan

[肯定例]

Bobby Riggs and Billie Jean King

Billie Jean and Bobby

King and Riggs.

Ms. King and Mr. Riggs

Golda Meir and Moshe Dayan または
Mrs. Meir and Dr. Dayan

- (2) 女性の婚姻上の身分をことさら強調すべきではない。結婚していようがまいが, 女性が使いたいと思っている名前で呼ぶべきである。

- c. 出来るかぎり, 両性を包括することばを使うべきである。性への不必要な言及は避けるべきである。

[否定例]

college boys and co-eds

[肯定例]

students

- d. できれば職業名は非性差別的であるべきである。それが男性ないしは女性による同一の職業を表わすものであっても, 別々の名称を使うべきではない。

[否定例]

steward or purser or steward

[肯定例]

flight attendant

policeman and policewoman

police officer

maid and houseboy

house or office cleaner; servant

- e. 働く人が常に (または通常) 女性ないしは男性であるという予断にもとづいて, 異なった代名詞をある

種の仕事や職業に用いるべきではない。複数形を用いるか、he or she とか she or he を使いなさい。

[否定例]

the consumer or shopper ... she

the secretary ... she

the breadwinner ... his earnings

[肯定例]

consumers or shoppers ... they

secretaries ... they

the breadwinner ... his or her earnings または
breadwinners ... their earnings

- f. 男性がいつでも最初に現われるべきではない。順序を変えて、時には次のような言い方もできる：
women and men, gentlemen and ladies, she or he, her or his

結語

これらのガイドラインが、著者や編集者に性差別の問題とその解決方法の覚醒を促すことを祈念するものである。

恐らくこのことが引金になったと考えられる辞書がこの頃アメリカで発行され、その辞書の表紙には、「はじめての non-sexist 辞書登場」といううたい文句が掲げられている (Bantam 社)。この辞書では前述した「ガイドライン」で [否定例] とされた単語・複合語などは全て姿を消している。さて、こうした働きの中で、正面から「ことばの問題」として女性の問題を取り上げた研究書が登場してくるのである。一つは Dale Spender の *MAN MADE LANGUAGE* (1980) (邦題『ことばは男が支配する』れいのるず=秋葉かつえ 訳/勁草書房) であり、もう一つは Deborah Cameron の *FEMINISM & LINGUISTIC THEORY* (1985) (邦題『フェミニズムと言語理論』中村桃子 訳/勁草書房) である。スペンダーは「言語は私たちの現実を限定する役を果たす。言語は世界を秩序だて、分類し、操作する手段である。言語をとおして、私たちが人間共同体の一員となり、世界が理解可能な有意義なものとなり、私たちの住む世界ができあがるのである。しかし、この、世界を創造する機能が世界を限定する力をもっているというのは皮肉である。特定の言語を学び「人となる」道にアクセスをもつことによって、私たちはその過程で「社会化」され、世界を見る目を特定の文化の世界観に従って限定してしまうことを身につけてしまった。家父長制社会の言語を学んだ私たちは、同時に家父長制秩序に従って世界を分類し管理することも学び、世の中のつじつまを合わせる方法が他にもあるかもしれないという可

能性を締め出してしまうことをも学んでしまったのである」(p. 3) と述べて、ホモ・ロークエンスの裏側に潜む問題を指摘するのである。さらには、そのホモ・ロークエンスの半分を形成している「女は、文化の諸形式をつくりだす過程から歴史的にずっと排除されてきている。そして、言語というのは結局一つの文化的形式——しかも最も重要な形式——であるから、かなり大ざっぱな言い方をすれば、言語は男によって作られ、男の目的に合わせて使われてきたものだと言える」(p. 52) と主張するのである。これまで「女はおしゃべりな存在である」とされてきた特徴も、よく検証してみるならば、実は〈沈黙〉を強いられた〈不可視〉な存在にされてきたことが明らかになり、その理由は、女が女自身の経験を記号化する過程から排除されてきたからである、として「意味を生成する能力は男女とも持っているのだが、女は自分達の意味を取り上げて社会一般の意味に加えてもらえる立場になかった」(p. 52) と述べている。これまでは、女性のものであるべき事柄にまで男性が意味付与 (= 記号化) をしてきているのである。例えば、motherhood (母性) にしても〈女の生き甲斐〉〈女を悦びに焦がれ、悦びに満ち満ちた状態にしておいてくれる美しいもの〉という意味が男によって付与されている。しかし、女は母である自分の現実的経験から得ている〈母性〉の意味と、この男によって与えられた意味との間の矛盾に苦しみ、結局おかしいのは自分のほうなのだ結論づけてしまうことになるのである。こうし

た状態を打破しようということで、フェミニズム運動の中から自然発生的に生まれた女同志の話し合いの場である‘意識高揚の会’(consciousness-raising: CR)の果たしてきた役割は重要であるとしている。しかしながら、男を排除した中での“話し合い”が、どれほど〈平等〉で〈本物〉で〈バイアスのないもの〉であっても、そこから一步外へ出たらやはり男中心の世界であることには変わりがないのであるし、そもそも女の経験が言語を媒介にして生成される以上、男優位、男中心の価値観に影響されないということは不可能である、と言わざるを得ないのかも知れない。

こうしたデッドロック(停頓)を越えようとするのがカメロンの提起である。カメロンは、これまでのフェミニストによる言語理論は三つの研究分野に区分できるとして、① 性差の研究(男と女の言語の使い方は異なるか、異なっているとしたら、それは何を意味しているか) ② 言語の中の性差別(その影響、性差別を無くする方法) ③ 疎外(言語とは、女が自分達の経験を表現することができないような「抑圧する者の言語」なのか)をあげている。そして、これらの異なるアプローチに共通するものとして、(1) なんらかの程度で言語決定論を含んでいる (2) 男が、男性中心社会の他のすべての資源同様に、言語を支配していることが前提となっている (3) 女が話し手や書き手として不利な立場に置かれていると考えている、という言語決定論をあげている。もう一つの共通点として言語支配——支配階級は言語を私物化し、それによって支配階級の力を補強し正当化することが出来る——がある、としている。ところで、これまでのフェミニスト言語理論の限界は、性差別的言語の改善だけでは女性の立場は変化もしないし、向上もしないし、女性への抑圧も解決しない、ということであった。こうした不毛な言語論的言語学に対してカメロンは、「言語とは、他の社会行動の形態から切り離して考えられるものでもないし、そのような行動形態すべてが関与する時間と空間の次元から抽象化できるものでもない…… ‘人間が住んでいるコミュニケーション空間は、言語と言語でないものに都合良く分けられるようなものではない’ のである。話すという出来事を時間と空間の中に位置付けるということは、(これは、ソシュールの共時的と通時的、ラングとパロールの二分法を破棄することである)、統合的分析にとって非常に重要なことである」(p. 140)とし、また「言語を使うということは創造的プロセスであるということである。人間が遭遇する新しい状況には限りがないので、その状況に応じてコミュニケーションが要求されることにも限りがない。この要求を満たすためには、話し手と聞き手は常に言語を再生して行かなければならない」(p. 140)とも述べている。ここにおけるコミュニケーションは、定められた(つまり、与えられた)体系に基づいて定められた意味を交換し合い、(幻想である)完全な相互理解を目的としているものではなく、(男女を問わず)自分の経験と完全に一致することも、聞き手に自分の意図通りに理解して貰える保証もないままの「ひとつひとつが困難を克服して行く日々の喜び」(p. 143)であり、「不完全なコミュニケーションは、創造的で柔軟な象徴体系のための支払う犠牲なのである」(p. 142)と主張し、言語決定論・男の言語支配・女の言語からの疎外に終止符を打つのである。つまり、言語の意味を言語体系から決定できないのであれば、言語があらかじめ人間の認識を支配することもないし、また言語の意味が固定できないのであれば、その意味を支配することも不可能になるからである。言語が新しい状況に応じて新たな意味を創り出すものであるならば、女の経験も表現可能になる、からなのである。こうして、言語は使われることによって常に革新していくことを認識し、フェミニスト自らが非性差別的意味を創り出すのであるという意識を持って言語を使用する“ディスコース”を提起している。

Ⅶ. おわりに

筆者はすでに、「女が‘教育された言葉’ではなく、女自身の言葉を獲得し、あらゆる場面でもっと表現し、その表現を消さないこと」、「一度は自分の身体を通し、自分の身体とされてしまった〈ことば〉を、自分の身体によって表現できる(する)抑圧的でない〈ことば〉を創造し、開拓することが必要であり、その作業はすでに開始され、現在も進行中である」ということを述べた(『アマゾネスの言語学』1988)。同年にアメリカで出版された D. Cameron の *FEMINISM AND LINGUISTIC THEORY* によって、アメリカのフェミニズム言語学者が、チョムスキー、ソシュール、ラカン、フロイトたちに連なる者達がまき散らした悪弊を乗り越えて、ここまでに至ったことの意義はまことに大きなものがある。

これまで筆者が“人間言語学”の課題の一つとして追及してきたテーマが、同一の地平において論じられ得るようになったことは、大きな喜びであるとともに

に、今後はこのテーマが“フェミニズム言語学”という枠組みの中において扱われるのではなく、〈言語学〉さらには〈人間言語学〉というパラダイムの中で論じられる時期が一日でも早く到来することを祈念するものである。

[1990. 10. 21. 京都時代祭りの日に筆を擱く]